

【 弓道教本 4 卷 (P240-241) 】 より

☆弓を立てる

(開き足の)残身の姿勢から弓を立てるとき、手元から弓の先端にまで心が通うような気合いをこめた息合いで、弓の先が体の中央を通過して真っ直ぐに立ってゆけば、動作も生き、弓も生きます。

弓を立て、身は伸びて左膝を生かします。

甲矢を射終わったあとは、跪坐をして左膝を生かして、弓を立てます。

☆矢番え動作

矢番えの動作は、跪坐の体構えがくずれやすいから、体の維持には、余程に心掛けねばなりません。

左肘を張って弓を立て、弦を返しますが。それは、腰の辺にとった右手を、そのまま水平に弦までもってゆくようにすると、弓の下の成り場の辺で弦を返すことになり、動作に心が通って、体もくずれないものです。

次いで矢を持った右手を、左拳を越すところまで送り出し、目は矢に添って羽根を見(甲矢・乙矢の検別)て甲矢を人差指と中指の間にはさみ、顔を戻し、右手は矢に添って筈を持ち(このとき顔も手に添って動きますが、目づかいを主とする)矢を一度に送って矢番えをします。

この動作は、矢の射付節を持ったときですが、矢の板付をかくして持った場合は、矢の中程を持って弦まで送り、次いで筈を持って二度に送りこみ矢番えをします。

これは、射付節を持つた場合は、筈までの長さは短かく、板付をかくして持った場合は、その長さが長くなるための動作の違いともいえますが、これは流儀の作法です。

この矢番えの注意点は、弦を返すときと同じように、矢番えで右手が左拳を越すとき腰を浮かせたり、前屈みになりやすく、体構えをくずすので、よく腰を詰めて動作することが大事です。

また左手にもってゆく矢は、心掛けて水平にして運ぶことであり、左手に移った矢も水平に保持されていなければ、矢も動作も生きません。

弦に筈をかませ、乙矢を持った手は、矢をいったん垂直に立ててから(筈は床につけない)、羽根を的に向けて水平にし、矢の走り羽を下にして薬指と小指、または中指と薬指の間に打込み。射付節の辺を弦にあてて、甲矢、乙矢を並行させます。

甲矢を弦に番えるときは、袖摺節を上によればよく、乙矢の走り羽を下にするときは、篋中節を上によればよいので、いちいち顔を動かすことはありません。

これらの動作は、連続して行われるもので、特に動作に心を通わせ、息合い、間合いの調和をとりて一つの流れとして、腰の辺に右手を復して残身をとります。

【 立射の作法 】 より

4、射位で坐射の射手が開き足で脇正面に向きを変えるのに合わせて、的を見て足踏みを行う。

5、坐射の射手の矢番えに合わせて肩の高さ(弓と弦の間に顔が来る)で矢番えを行う。筈を保ち、捧持する気持ちで、円相にて左膝頭に本弭を置く。

6、坐射での立ち上がるタイミングで取矢(乙矢の場合は、弦調べ)を行い、前の射手の弦音で取懸け、行射する。

7、甲矢を射終わり、物見を返したら、的正面に向きを変えながら足踏みを閉じ、本座まで退がり、未弭を床に着けず、矢を持ち替える。